
私の歌姫

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の歌姫

【Nコード】

N2036Z

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

伍アキオは海外出張中、美しい華僑の女性アイリーンに出会う。彼女と会いたければかりに嘘をつくアキオだが……。 (本文の英文、中文と日本語に違和感を覚えるかもしれませんが、英語と中国語で考えた場合、そう表現したほうがいいと思っています。しかし英中ともにまだ未熟なのであれ?と思っただら拍手コメントからご連絡ください)

怪しい会社（前書き）

アロハシリーズの一つです。単独でも読める話です。

怪しい会社

胡散臭いな。

私は薄汚れた茶色の建物を見上げる。

近代的な建物が建つ中、そこだけが古ぼけて見えた。窓はなぜか黒くて、中が見えなかった。

本当にここか？

私は手元の紙を見つめる。

間違っていない…

私はため息をつくと建物の中に入った。

この国に出張することがわかり、何気なくパトリックに話したら、支社の社長に渡してほしいものがあると、紙袋を渡された。

面倒だと思って断ろうと思ったら、その彼女のミヒロちゃんに頭を下げられた。

妹のような可愛い笑顔に思わずわかったと頷いてしまった。

彼らと会ったのは丁度半年前だ。

初めは怖がっていたミヒロちゃんも最近は私になついてくれたらしく、よく連絡をくれる。

しかし、パトリックはそれが嫌いというか、嫉妬するらしく、ミヒロちゃんから電話がくると奴からも連絡が必ず入る。

面白い男だ、からかうのが面白くてわざとミヒロちゃんに連絡をとったりしている。

奴はクールを装った面白い男だ。
アニメ好きという点を覗けば気が合う。

どうやら渡された紙袋には私が苦手なものが入っているようだった。支社の社長もおかしな奴だと聞いている。
どんな面白い奴が楽しみだな。

私がそんなことを考えているとチンと音がして、エレベーターが止まる。

確か右手の一番端の530号室って言ってたな。

私は妙な音がするエレベーターから降りると、表札を確認しながら廊下を歩く。
静まり返った建物だった。
白いドアだけが廊下に見える。

本当おかしな場所だ。
パトリックとミヒロちゃんはこんなことに勤めていたのか。
信じられんな。

『Tan Tan Travel Agency』の表札が見え、
私は一息つくとノックをする。
ドアベルとかインターフォンがないことが驚きだった。

「はい？」

そう声がして褐色の髪日本人女性が顔を出す。

いつもの癖で私はじつと顔を見てしまう。
女性は私の視線にむっとした表情を見せる。

怒った顔がなんだかそそる感じだな。

私はそんなことを思いながらも営業スマイルと浮かべた。

「すみません。私はパトリックの友人の伍アキオです。館林社長を訪ねてきたのですが……」

「パトリック？ああ、聞いている、聞いている。鈴木、怪しい奴じゃないさそうだ。中に入ってもらえ」

中からそう声が聞こえ、鈴木と呼ばれた女性はじろつと私を見た後、ドアを全開にする。

「どうぞ」

中に入ると一番端の机に小麦色の肌の30歳過ぎの男が見えた。もてそうな顔で少し自信過剰にも見える笑顔を私に向けていた。

「伍さん、悪かったですね。こんなところまで来てもらって」

男、多分館林と思われる男は笑顔を浮かべたまま、私に近づいてきた。

「いえいえ。パトリックはいい友人なので。長三山さんもよろしくと言ってましたよ」

「ああ。長三山？あの子も元気にしてるんですね？」

「ええ」

私は館林にっこりと笑顔を向けながらうなずいた。

歌姫

「なるほど。証券会社」

応接室に通され、私と館林は名刺を交換する。

「ああ、本社と同じビルに入居しているんですね」

「ええ」

私は館林の問いにうなづく。

「伍というのは珍しい名字ですね」

「ええ。私の両親は中国から来たんですよ。でも私は日本生まれ、日本育ちなので完全に日本人なんですけどね」

「なるほど。それじゃあ、中国語はもちろんできますよね」

「ええ。でも会話くらいですけど」

「それでも十分ですよ。私も中国語は勉強したいと思っているんですけど、なかなか」

「いやあ。私の場合、英語がからつきしだめで、出張の時は結構困ることが多いんですよ」

「そうですか？」

「ええ、世界に華僑は散らばってますが、共通言語はやはり英語ですからね」

私と館林はそんなそつのない会話を交わす。

館林は人のよそうな男に見えた。しかし、笑顔の奥の瞳はじつと私を見つめていて、本心が掴めない男だった。

「はい、お茶です。どうぞ」

ドアをノックする音がして鈴木さんが香りのいいお茶を持ってくる。テーブルの上に湯飲みを置くときに、ふわりと爽やかな香りが出て、私は彼女の顔を近くで見つめずにいられなかった。

よく見ると私好みの顔の中世的な顔だった。このガードが堅い感じがそそるよな。

「伍さん」

そんなことを思っていると、ひやりとするような声が呼ばれ、私は考えを中断させられる。

目を向けると先ほどまでの笑顔を消した、鋭い視線を向ける館林がそこにいた。

「申し訳ないが、この鈴木はすでに婚約者がいるんだ。遊ぶなら他の子を選んでくれませんか？」

「ははは。面白いことを言いますね。私は何も言ってませんよ」

「先手必勝です。あなたは油断できなさそうな人なので」

「ははは。館林さん」

私が愛想笑いすると、館林がにこりと笑う。

俺の女に触れるな

そう館林を言っているのがわかる。

鈴木さんは館林が先約済みか。

まあ、いい。

この国にあと4日はいる。いい女がいるだろう。

「じゃ、パトリックと長三山によろしく伝えてください」

30分ほど話をして、私は会社を後にした。

ガタガタと揺れるエレベーターに乗り、一階に着いて降りようとした時、強引に入ってきた女性とぶつかる。

「?!（君!）」

出る人を優先にしなくてどうする。

私は女性を睨みつけた。

「?不起!（すみません）」

女性はそう謝り、私がエレベーターから出たのを確認して中に入る。すれ違いざまに薔薇の香りがした。誘われるように彼女の顔を見ると、私は不甲斐なく怒りを忘れ女性に見とれた。

真っ白な絹のような美しい肌、少し釣り眼の黒い瞳、薔薇の花弁のような唇、ふわりとまとめられた髪ははらりと少しほどけて、白いうなじに黒髪が絡まっていて、何とも言えない色気を醸し出していた。

しかし私が声をかけようとした矢先、無残にもエレベーターのドアは閉じられ、上がっていった。

すぐにチンと微かな音がして、5階で止まったのがわかった。

まさか?

確認しようかと思ったが、腕時計は10時半を指しており、私は次のアポの場所に向かうしかなかった。

その夜、私は同僚との夕食を早めに切り上げ、滞在ホテルに戻った。

今朝見た彼女のことを気になっていた。

しかし館林の会社に電話して確認するのは自尊心がゆるさず、ミヒロちゃんに電話した。

「ああ、届けてくれたんですね。ありがとございます。館林さんは元気でした？」

電話口から可愛らしい声が聞こえる。

この声はいいよな。

パトリックが少しうらやましく思える。

「ああ、元気だったよ。鈴木って女性がいて仲良さそうだったよ」

私はあの女性のことをどう切りだそうか迷いながら、そう答えた。「そうなんですネ。ああ、うまくいってよかったです。館林さんは強引だからちよつと気になってたんです。ところでアイリーン見ました？」

「アイリーン？」

私は胸がざわつくのがわかった。

「そうです。バーのシンガーのアルバイトしていて、すごく綺麗な人なんですよ。結局あまり話すこともなかったんですけど……。歌手になれたらいいなと思ってて」

綺麗？歌手？

あの女性はアイリーンなのか？

聞くよりも先に他のスタッフについてミヒロちゃんが話してくれたので、私はそれとなく遠回りにそのアイリーンという女性についていくつか質問した。

15分して電話を切った後、私はパトリックの苛立つ様子を想像して面白がることもせず、ミヒロちゃんから得た情報をまとめる。

現地の華僑で、年頃は20代後半、真っ黒なストレートの黒髪、釣り目の瞳、ミヒロちゃんより少し高めの身長……

彼女だ。

きつと……

私は確かめずにはいられず、パソコンを開くと、その名前を入れる。

Aileen Huang Singer

グーグルでそのキーワードで検索する。
そしてヒットした。

彼女だ！

私は食い入るようにパソコンの画面を見た。

シンガールの写真と共にバーが紹介されていた。写真の彼女は化粧の具合と衣装で印象が違って見えたが、彼女に間違いはなかった。
私はメモを掴むと、バーの場所を書く。

毎週月曜日、夜9時からか。

今日は運がいいことに月曜日だった。腕時計を見ると午後10時。
すでに終わってるかもしれない。
しかし私は運を頼って、その店に行くことに決めた。

嘘

真っ黒なドアを開け、中に入る。

狭い店の中に小さなステージが設置されていた。

そこに彼女は立っていた。

ピアノを弾く男がいて、その側で彼女はスタンドマイクに向かって歌っていた。

すごい。

私は何か飲み物を頼もうと思っていたことも忘れ、彼女の歌に聞きほれる。私の英語力では歌の本当の意味を知ることができなかった。

しかしその切ない歌声が別れを歌っているがわかった。

「Aileen！」

歌が終わり、観客が立ち上がり、歓声を上げる。

私も思わず一緒になって手を叩いていた。

彼女はステージの上で黄色いライトを浴び、妖艶に微笑むとアンコールに答え、もう1曲歌い始めた。

だめだ。

参った。

彼女がステージからさり、店内に音楽が流れ始める。私のそれを聞きながら彼女の歌の余韻に浸っていた。

注文したウイスキーを飲み干し、私はカウンターに置く。そしてバーテンダーに彼女のことを聞いた。

「？是不是黄？玲？（あなたはアイリーン・ホワンですか？）」

「是。有什？事？（ええ。何か用？）」

店から出て行くこうとする彼女を捕まえ、そう聞いた私に彼女は冷たい視線を向けた。歌っている姿と正反対の氷のような態度に私は気分が高揚する。

「我？可以？一下？？（少し話せますか？）」

私の言葉に彼女はふんと鼻で笑う。

「？是？？我没有？？。（あなたは誰？時間がないんだけど）」

「等一下。我是从音？公司来的。？的歌很好听。？可以跟我？一下？？（待って。私は音楽会社の者です。あなたの歌は素晴らしい。私と少し話をしてくれませんか？）」

私の元から離れようとする彼女の手をつかめて、私は思わずそう言っていた。ミヒロちゃんから彼女が歌手を目指していると聞いていた。だから彼女を引き止めるために嘘をついた。

「伍先生。？？？。再？（伍さん、ありがとうございます。また）」

嘘をつき、彼女をレストランに連れ込み、1時間ほど話をした。

閉店間近の店で、私は音楽業界関係者の振りをした。

そして明日も会うことを決め、別れた。

近くで見た彼女はまた格別だった。きらきらと目を輝かせ私を見ていた。花びらのような唇が動いたたびに私はぞくぞくするのがわかった。

彼女に触れたい。

その衝動を抑えながら、彼女を話した。

結局、私はいろいろ妄想をしまい、店員が出て行ってくれと
いつまで店に居残った。

明日の約束は午後7時。

心が躍った。

しかし、同時に嘘をどうしようかと思う。

でも嘘をつかないと彼女は会ってくれない。

明日、会ったら正直なことを言おう。

私はそう決めて、ベッドに入った。

翌日、本業にはまったく力が入らなかった。

油断をすれば彼女のことを思い出し、今夜のことを考え、胸を躍
らせた。

そして約束の時間がやってきた。

同じ店で私が待っていると言っていると彼女がやってきた。

ステージのときとは違い服装は白いシャツに紺色のスカート、仕
事帰りのような格好だった。化粧も薄化粧であったが、彼女の美し
さは損なわれていなかった。

むしろ、私は今日の彼女のほうが好みだった。

「? 上好。(こんばんは)」

そう挨拶され、私達のデートは始まる。

昼間、作戦を考えていた。
彼女とできるだけ、一緒にいたかった。

だから彼女が働いているバーに連れて行ってもらった。バーに行き、私は日本の音楽会社の名乗った。現地の音楽会社はばれそうなので名乗れない、中国という手もあったが、突っ込まれそうでやめた。最終的に日本であれば私のほうが詳しい、そう思いそう嘘をついた。

彼女が歌っているバーやレストランを数箇所回った後、休もうと近くのカフェに入る。

「？是日本的。？是什？人？（あなたは日本から来たんですね。どこの国の人ですか？）」

それは彼女が私自身について聞いた初めての質問だった。

私は嬉しくなって、話始めた。

「我是？人。可是我是日本人。（私は華人です。でも日本人ですけど）」

まずい、まずい。

夜11時、私はタクシーで家の近くまで送ると言ったのに彼女に断れ、一人でタクシーに乗って帰ってきた。

どうしようもないくらい、彼女にとりつかれていた。

触れたくてたまらなかった。

無表情に見える彼女だが、近くで見つめていると彼女の表情の變化がわかった。

明日も約束を取り付けた。仕事があるということ、時間は遅めの10時。

明日こそは本当のことを言おうと誓い、私はベッドに入った。

「あれ、伍さんじゃないか」

翌日、顧客の入っている建物から出ると、スーツ姿の館林を見た。そしてその隣にいたのは彼女だった。

「伍先生！？（伍さん？）」

館林と私が知り合いであることに彼女は驚いているようだった。

まずい。

嘘がばれてしまう。

館林から言われる前に、こっちからばらしたほうがいい。

「館林さん、すみませんが、アイリーンさんを少しお借りしてもよろしいでしょうか？」

「?いいですが……: Aileen, Mr. Gowants
to talk to you something? Is it
ok for you, right? (アイリーン、伍さん
が何か話したいことがあるそうだ。いいだろう?)」

「Yes」

彼女は少し怒ったようにそう答え、私を見つめる。

その瞳には疑惑の色が色濃く現れていた。

怒るな。

嫌われるか。

でも今言わないと。

館林に言われるよりはましだ。

そう私は決め、彼女とお茶をすることにした。

「???我!? 什?? (騙していたんですね。 どうして?)」
私は音楽業界のものではなく、単なる会社員で出張にきていることを伝えると彼女は血相を変えた。

怒りだけではなく、悲しみも感じ取れた。

嘘をつくべきじゃなかった。

初めから正直に話すべきだった。

でも彼女を共に時間をすごしたかった。

「?不起。 因? 我想和? 在一起, 所以我??。(すみません。 私はあなたと一緒にいたかった。 だから嘘をついた)」

「???了??? 真奇怪! (そんなバカなこと。 おかしい!)」

彼女は持っていたグラスの中身を私にぶちまける。そして店から出て行く。

私は呆然と去り行く彼女の背中をただ見つめるしかなかった。

「キャンセル?」

「そうです。非常に申し訳ありません。また次回来た時は…」
私の言葉の途中で電話が切られた。

当たり前か。

あの後入っていたアポをキャンセルした。服がぬれてホテルに戻って着替えるしかなかったこともあるが、シヨックのほうが大きかった。

グラスを持ったとき、彼女の瞳に涙が見えたような気がした。

ミヒロちゃんが、彼女は本気で歌手を目指しているといってたな。

それを私は利用した。

怒っても当然だ。

水をぶっ掛けられるとは思わなかったけど。

私は自嘲的な笑みを浮かべる。

洗面所の鏡に映る私は疲れているようだ。

完全に嫌われたな。

会ってくれるわけがない。

私は蛇口をひねると冷たい水で顔を洗う。

そして洗面所から出て、新しいシャツを取り出す。

3時から別のアポが入っていた。

私は目を閉じ、彼女のことを頭から追い出そうとする。

しかし、それはできない相談だった。

脳裏にちらつく彼女は泣いている顔だった。

泣き顔なんか見たことないのに。

私は馬鹿な自分を心の中でののしりながら、ホテルを出て、顧客の会社へ向かった。

白酒

午後9時、私はホテルにいた。

取引先を夕飯に誘い海岸沿いのシーフードレストランで食事を取ったが、それだけでホテルに戻ってきた。本当であれば夜の遊びも誘うべきだった。しかしそういう気分にならなかった。

忘れようと思ってても、彼女の泣きそうな顔が浮かんできて、思考の邪魔をする。

私はホテルの近くのコンビニで買ってきた白酒の小さなボトルと開けると、グラスを使うことなく、口付けで煽る。

芳香とともに酒が喉を通った後、痛みが走る。

白酒のアルコール度数は高いものが多く、煽って飲むようなタイプではない。普段はちびちびと飲むのだが、今日は芳香を楽しむよりも酒におぼれたくなり、煽った。

外の賑やかな音が聞こえる中、静まりかえった部屋でソファの寝そべり、何度もボトルと煽る。のどの痛みと共に酔いが回ってくる。

とたん、私はなんだかおかしくなってきた。

たかが、女に嫌われたくらいで自棄になる自分があほらしかった。

彼女の顔が浮かぶ。

黒い瞳が傷ついていた。

歌手を目指してバーで歌い始め8年と言っていた。

いくつか賞や番組に応募したが、どれも第一次選考で落ちているらしかった。

8年は長い……
今度こそチャンスが巡ってきたと思い期待させた後、地獄に落と
した。

期待していなければショックも大きくなかったはずだ。
しかし私は期待させてしまった。

私は自分の罪を忘れるために、再度白酒の入った小さなボトルを
煽る。喉が焼けるように痛みがはしり、眩暈がする。
気がつくくと白酒は底をつこうとしていた。

「買いにいこう」
私はさらに泥酔するために、白酒を求め、部屋をでた。
自分が千鳥足になっているのがわかった。
視界もぼんやりしてるような気がする。コンビニはすぐ近くのは
ずだ。私はかすむ視界の中、歩き続けた。

ドスンと誰かが私にぶつかる。
「こらー！」
謝らずに去ろうとするのが私は頭にきて声あげる。しかし男は
振り返ることもせず、そのまま足早に立ち去る。
嫌な予感を覚え、ポケットを探る。
やられた！

私は男を追おうとしたが、足元が酔いのため不確かでそのまま、
歩道の上でこける。
周りの人がぎょっと私を見た。

男がちらつと私を振り返り、走り出した。

「小?! (泥棒!)」

私が体を起こしながらそう叫ぶ。

遠くでスリをした男が誰かに取り押さえられる。

ざわざわと人が騒ぎ始めた。

「? 可以起来?? (起きれる?)」

その声がかげられ、私の心臓はどきりとした。

顔を上げるとやはり声の主はアイリーンだった。

「? 真是奇怪。(本当おかしな人)」

彼女は呆れたような声を出して私に手を差し出す。

「? 什?? 在? 里? (君はどうしてここに?)」

私は彼女の手を掴み立ち上がる。

「我做工了。(仕事よ)」

彼女はそう答え、振り返る。スリの男を捕まえてくれた男が側に来ているのがわかった。

「Are you OK?」

男が日本語なまりの英語でそう聞いてきた。

「∴ 大丈夫です。ありがとうございます」

なんで日本人と一緒にいるんだ?

私はそう思いながら男に礼を言う。

「日本人ですか? 中国語うまいですね。警察の方がお話したいみたいです」

日本人の男はそう言い、視線を先に向ける。制服をきた警察官が二人、スリの男を捕まえていた。

事情聴取か。

面倒だけどうがないか。

「ありがとうございます。おかげで大金を失わずにすみました」
私はにこつと笑って男に答える。

酒は回っているがどうやら長年かぶっている営業の面はこういうときに自動的に出てくるらしい。

彼女はじつと私に視線を向けていた。その視線が何を意味するのかわからなかった。

「Excuse me. Can you speak English?」

警察は私に近づいてくるとそう口を開く。華僑の警察官だった。

「不好意思。我的英？不好。？可以跟我？？？（すみません。

私は英語がうまくない。中国語で話しかけてもらってもいいですか？）」

「？是中国人！？（あなたは中国人ですか?!）」

私の中国語に警察官が目を見開くのがわかった。

まったくいつものパターンだ。基本的に面倒なので日本人で通すことにしている。しかし警察の目の前なので一応正直に説明することにした。

「我是日本人。可是我的父母是从中国来的。（私は日本人です。しかし両親は中国出身です）」

私がそう話始めると警察官が納得の顔をする。そして、私と警察官、なぜかアイリーンと日本人の男も一緒に近くの派出所に行くことになった。

事情聴取は1時間ほどかかり、私達は解放された。

「ありがとうございます」

派出所の入り口で私は日本人の男、谷川にお礼を言う。

どうやら谷川は添乗員で彼女がガイドするツアーの担当で、帰る途中だったらしい。

そういえばミヒロちゃんがアイリーンが不思議なツアーのガイドをさせられてるって言うっていたな。

「じゃ、僕はここで。Aileen、how do you go back home? (アイリーン、どうやって家に帰るの?)」

「I will take bus. Don't worry. Thank you (私はバスを使います。心配しないでください。ありがとうございます)」

アイリーンの答えに谷川は私と彼女の顔を見比べる。

「谷川さん、タクシーきましたよ！私はその辺を酔いを醒ますために歩いてから、帰りますから」

私は道端でタクシーを止めてから谷川にそう言う。早くこの男を帰らせて、彼女と話をしたかった。

「あ、ありがとうございます。それじゃあ」

男はいぶかしげな顔をしたが、運転手がせかせかせたこともあり、タクシーに乗り込む。

「いろいろありがとうございました」

私は自動開閉ではないタクシーのドアを閉めて、谷川に頭を下げる。車の中で頭を下げ返した後、男が運転手に行き先を伝えているのがわかった。

ぶつんと廃棄ガスを排出し、タクシーは入りだす。

彼女は私の顔を見ようとせず、タクシーが視界から消えるのを確認するとくるりと背をむけた。

「?玲! (アイリーン)」

私は慌てて彼女の手を掴む。

「??我一点??。?可以听我的??? (時間をください。私の話を聞いてくれませんか?)」

彼女は何も答えず手を振り払うと、先を急ごうとする。

「?玲! (アイリーン)」

「放?我! (離して)」

気がつくとは私は彼女を抱きしめていた。ふわりと甘い香りがして眩暈がしそうになる。

「?玲!求求我。听我的?。(アイリーン!お願いだ。私の話を聞いて)」

「放?我!!(離して!!)」
「っっ」

ビタンと音がして、頬がはたかれたのがわかった。

「???!(変態!!)」

彼女はそう叫び、私を睨みつけると駆け足でいなくなる。

「?玲!(アイリーン)」

あほだ。私は…

後悔と共に私はひりひりと痛む頬をさすりながら、街へ消えゆく彼女の背中を見つめるしかなかった。

おせっかいな男

「伍さん、おまたせしました」

パトリックの元上司でアイリーンのボスである館林は私の姿を見ると、にこつと笑った。

朝、ホテルで身支度を整えていると館林から電話があった。パトリックとミヒロちゃんに渡して欲しいものがあるから、夕食も兼ねて会って欲しいということだった。

単なる夕食の誘いであれば断るつもりだった。しかし、ミヒロちゃんの笑顔を浮かべるとしようがないと誘いに乗ることにした。

夕方ホテルに迎えに来るということで、ロビーで待っていると館林は来た。相変わらず隙のない出で立ちで、嫌な奴だった。

「どこにいくんですか？」

「いいところですよ」

私の問いに館林は意味深な笑みを浮かべる。

館林が車を走らせ着いたところは見覚えのある場所だった。

私は車から降りるとその店を見つめる。

「ここは黒ビールがうまいんですよ。ウィンナーも有名で……。アイリーンが今夜多分歌うはずですよ」

「……………」

この男……

私は館林の誘いを断って、帰ろうかと一瞬考えた。

しかし明日の朝、日本に帰ることを考え、彼女の姿をみる最後の

チャンスとだと踏みとどまった。

「本当、あなたは……」

「なんですか？さ、行きましよう。もう歌が始めるころです」

館林はにやりと笑うと店の中に入っていく。

私はため息をついたが、大人しく彼の後に着いて行った。

「Two glasses of Schwarzbier, please (シュヴァルツビア(ドイツの黒ビール)を2杯お願いします)」

椅子に座るとやってきた店員に館林がそう注文する。

「このビールは濃くがあつてうまいですよ」

「……」

ビールは苦手だったが、そうも言ってもらえない。この男に苦手なもの知られるのも嫌だった。私はステージに目を向け、アイリッシュが出て来るのを待つ。

これが最後かと思うと、胸が痛くなる。

「伍さん、その傷どうしたんですか？」

ふいに館林がそう質問をした。暗がりで見えないはずなのだが、

館林は私の頬のひっかき傷を目ざとく見つけようだった。それは昨日、彼女ははたかれた時に、その爪でやられた傷だった。

「……ちよつと猫に引つかかれて」

「ふーん、猫ですか？」

館林はにやにや笑いながらそう聞く。

まったく嫌な奴だな。

「そうです。気の強い、美しい猫ですよ。館林さんもこんなところ

にいていいんですか？恋人があなたの帰りをまっっているんじゃないですか？」

「ああ。待ってますよ。でも今日は特別です」

館林がそう答えると同時に生バンド演奏が始まった。

「Ladies and Gentlemen」

アイリーンの声が店内に響き、私はステージに釘づけになる。

ステージ上の彼女は真つ赤なチャイナドレスを身につけ、スリットからそのすらりと伸びた足が見えていた。

いい女だ。

まったく。

暗がりにいる私達にアイリーンは気が付いていないようだった。彼女はお客のリクエストに答えると、バンドのメンバーに合図をする。

聞いたことのある洋楽の伴奏が始まり、アイリーンがマイクを持つ。

彼女の歌が始まった。

それは失恋の歌のようだった。まさに私にぴったりの歌だな。

私は自嘲しながら歌を聞いた。館林の手前、あまり感傷的にならないように心がける。

「伍さん、乾杯と行きましょう」

運ばれてきた黒ビールを私に勧め、館林は笑う。

何に乾杯だ。

毒づきながらも私は同じように笑うとグラスを持つ。

「我々の未来に乾杯」

男がそう言い、私も乾杯と言い、カチンとグラスを合わせる。

口に含んだビールはほろ苦く、私の心情にぴったりな味だった。

「なんだか全てが当たりすぎて笑いたくなる。」

「伍さん？」

「なんでもないです。館林さん、ミヒロちゃんに渡したいものはなんでしょうか？」

「ミヒロちゃん？伍さんはそう呼んでいるんですね。パトリックが怒りませんか？」

「ああ、まあ。でも慣れたみたいですけど」

酔ってるはずはないのだが、思わず漏らした言葉に館林が眉を潜める。

「伍さん、パトリックをからかうのはほどほどにして置いたほうがいいですよ」

「わかってますよ。そんなこと」

痛い目にあったことがある。

言われなくてもわかっていた。

館林に渡されたのはまた紙袋だった。

中身は知りたくないな。

私はそう思いながら、紙袋を受け取る。

「伍さん、すみません。ちょっとトイレ行ってきます」
アイリーンが数曲歌い、ステージの奥に消えた後、館林がそう言
って席を立つ。

私は苦いビールを片手に、ぼんやりとステージを見つめる。

最後か……

彼女と会ったのはたった4回。そして知り合ったのは3日前だ。

それだけなのに、私の中で彼女の存在は消せないものになってい
た。

多くの女に関わって、交わってきた。

プラトニックに人を想うことなど今までなかった。

気になればすぐに抱いた。

だから、余計気になるのか。
抱けないから。

「伍先生?! (伍さん?!)」

その声が聞こえ、私は顔を上げた。
逃げようとする彼女の腕を掴む。

「我求求?。我明天回去日本。我想和???。可以?? (お願いだ。
明日私は日本に帰る。話がしたいんだ。いいだろう?)」

「可以。但是我?在外面?一下?。(わかったわ。でも外で話をし
ましょ)」

彼女に言われ、私達は店の外のテーブルに座る。外は平日のため

か人がそんなに多くはなかった。テーブルに置かれた蠟燭が彼女の顔を照らし、その美しさを際立たせる。

「？玲。我？上？。（アイリーン。私は君を好きになってしまった）」

私がその口に出すと彼女は驚いた顔をした後、笑う

「？？我。？就做？ 不是真的？我。（嘘つき。あなたはきっと私を抱きたいだけ、それは愛ではないわ）」

「不是。我真的？？。（違う。私は本当に君のことが好きなんだ）」

「我不相信？。（信じない）」

「？什？？（どうして？）」

「？先？我了。怎？能相信？？？（あなたは先に嘘をついた。どうやったらあなたを信じられるの？）」

「？不起。可是我真的？？。（すまない。でも本当に私は君が好きなんだ）」

「不要？。我不想听？的？。（何も言わないで。あなたの話は聞きたくない）」

彼女ははっきりそう言うと席を立つ。

話しても無駄だった。

嘘について彼女を傷つけた事実は消せない。

私は店に戻っていく彼女をただ見つめることしかできなかった。

「伍さん、ここにいたのか」

「ああ、館林さん」

明らかにタイミングを見計ったような現れ方で、私は彼女を私のところによこしたのが彼のもくろみであることがわかる。

変な気を回しやがって。

頭にきたが、この男なりに気を聞かせたつもりだと思って、にこやかに笑う。

まったくおせっかいな男だ。

だが、おかげですっかりした。

完全に振られた。

自業自得だな。

「館林さん、悪いけど。先に帰ってくれませんか。一人でアイリーの歌を聴きたい」

我ながら失礼な物言いだと思ったが、館林は気を悪くした様子ではなかった。むしろ気を使っている感じで逆に癪に障る。

「楽しんでください。パトリックとミヒロによろしく」

館林は私の気に障ったことを感じてか、手を振るとそそくさと店を後にした。私は苦い黒ビールを注文し、店の中に入る。今日が最後だ。私はそう思い、彼女の歌を最後まで聴いて帰ることに決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2036z/>

私の歌姫

2011年12月8日02時47分発行